

現代中国における少年宮の「衰退傾向」に関する研究

A Study on the “Decline Tendency” of Children’s Palace in China

劉 霄*

LIU Xiao

(要旨)

近年、中国の少年宮教育は衰退傾向にあり、校外教育における中心的地位を失いつつある。そのため、この衰退傾向にある少年宮の企画・運営の改善を図ることが急務である。

本研究の目的は、現代中国における少年宮の衰退傾向の要因・背景を究明し、保護者の教育意識を解明することである。中国において校外教育と位置づけられている少年宮の歴史を踏まえ、山東省済南市青少年宮の現状を把握するために、父母に対してアンケート調査をした。その結果、少年宮の衰退傾向の要因は、運営状況の衰退、教育機能の衰退、保護者の教育意識の変化であった。一方で、多くの保護者は子どもの校外芸術教育を選択する際、授業料が高い私立芸術教育学校を好む傾向にある。それは子どもの資質・素養の形成を望んでいるからであった。このことも旧態依然の教育をしている少年宮の衰退の要因である。

少年宮の衰退に対する認識に基づくと、調査の結果から公益機能を拡大すること、教育環境を改善すること、親の教育観念を転換させることが、今後の少年宮の教育機能を充実させ、少年宮教育の再構築を実現し、少年宮教育を拡大化するうえで必要である。

【キーワード】 校外教育 少年宮 私立の美術教育学校 衰退傾向 保護者の教育意識

1. 本研究の目的

本研究は、中国の公的校外教育機関である少年宮の衰退傾向を究明するために、その原因を探るものである。

中国経済の急激な成長は、基本的な衣食住を物質的に満足させただけでなく、子どもの教育への関心を高め、特に、音楽や美術、舞踊など芸術的素養の育成への関心を高めた。現在、子どもの校外教育の選択は保護者の大きな関心事となっている。

中国では、公的校外教育機関である少年宮は児童・青少年の校外での学習や生活を豊か

にする場として現在も利用されている。一方で、近年は生活が豊かになり、私立の芸術教育学校が設立され、その数は年々増加している。多くの保護者が子どもの校外教育施設を選択する際、学習費の安い少年宮から、学習費が高くても子どもの資質・素養を育成する私立の芸術教育学校に目を向けるようになった。

中国の少年宮教育の歴史は、1949年に設立されて以降50年の間を、初創期（1949年10月～1956年8月）、発展期（1956年9月～1966年4月）、崩壊期（1966年6月～1976年9月）、回復期（1976年10月～1982年9月）、改革期（1982

* 山口大学大学院東アジア研究科博士課程3年 (The Graduate School of East Asian Studies, Yamaguchi University)

年10月～1992年9月)、新しい発展期(1992年10月～1999年9月)の6つ段階に分けることができる(許2000:6-197)。

少年宮設立の目的は、「児童・青少年に向けた総合的な校外教育機関であり、学校に協力して、児童・青少年に対して共産主義教育、文化科学知識教育、生産労働教育、体育、美育を行うことにより、児童・青少年の全面的な発達を促進するものであった。少年宮教育の任務は、児童・青少年のための学校知識を強化拡大し、学校外の生活を豊かにし、さらに興味・特技・才能の育成を強化させる」ことである(許2000:24-25)。

ところで、そもそも中国における校外教育は、どのような目標・対象・特徴をもつのだろうか。沈(2002)は、「校外教育は、児童・青少年の心身を全面的に発達させるために、個性・興味・愛好・特技を伸ばすことを際立たせる。校外教育は児童・青少年を主体として独自に探索・研究・実験・制作をさせる。校外教育の活動は、多様な実践活動を強調し、児童・青少年の実践性を重んじる。校外教育は教育活動の開放性を重視し、より広く地域社会に広げること」と述べている(沈2002:78-79)。そのうえで、沈(2002)は、校外教育と素質教育の関係を分析し、校外教育の特徴である実践性・個性・多様性とは素質教育を全面的に実施することであって、実践性とは児童・青少年の創造的精神の育成に役立つものであり、個性の育成と多様な活動内容は児童・青少年の素質養成に有利であると指摘する(沈2002:144-151)。

沈の研究は、中国で最初の校外教育の書籍文献として価値があるものの、少年宮教育が現在の素質教育の要求に対応できていないことについてまでは指摘していない。

高(2002)は、少年宮の機能が十分に発揮されていないことの原因について、学校教育

と並行して進めることができなかったこと、社会のニーズを満たすことができていないことをあげている。具体的には、各地域の管理体制の差別化及び教育課程の独自性の弱さ、教育機能の不明確さ、資金難、教師の人材不足を指す(高2002:7-9)。同様に、少年宮の現状について調査を行った王(2012)は、北京市の東城区少年宮と済南市少年宮、深圳市少年宮のデータから、少年宮教育の市場ニーズは大きいのが、適齢期の児童・青少年の数が多く、現在の少年宮の規模と発展状況では児童・青少年の校外教育のニーズを満たすことができなくなっていることを指摘した(王2012:15-22)。あるいは、張(2012)は、「中国の青少年宮¹の市場化での発展は中国経済の発展速度より遅れている。青少年宮の運営と管理には多くの問題が存在している。政府の投資が少なく、青少年宮の発展の規模は小さく、人材不足、資金不足、管理制度の欠如などの問題がある」ことを指摘したが(張2012:2-5)、これら研究はその根本的な衰退の要因にまでは言及していない。

以上より、少年宮の問題点としては、主に管理体制の欠如、教育機能の不明確さ、資金不足、発展の遅れが考えられる(高2002、王2012、張2012)。そこで、本研究では、少年宮の機能をより明確に把握するために、2つの点に分けて調査・分析を行う。一つは運営状況で、少年宮の管理制度、組織形式、運営環境と教師管理に関するものであり、もう一つはカリキュラム、指導方法、教材など教育的機能についてである。

ところで、少年宮の芸術教育研究では、これまで保護者のニーズの変化への対応に言及したものは見当たらない。しかし、校外教育は親の教育選択に深く関わる問題であるため、保護者のニーズについても調査する必要があるだろう。また、先行研究には、少年宮

の歴史や変遷、少年宮の現状及び問題点などからその衰退要因について触れたものはあるものの、その数は少ない。そこで本研究では、校外教育の歴史と保護者の意識調査から少年宮の衰退傾向の背景・要因について明らかにしていく。調査の方法は、文献調査、聞き取り調査、アンケート調査である。

2. 校外教育の概況

(1) 校外教育の歴史

中国における校外教育は、ソ連の影響を受け、1949年4月に遼寧省大連市に最初の校外教育活動施設「大連市児童文化館」を設立したことはじまる（図1）。この児童文化館は総合的な校外教育機関であり、館内には閲覧室、展覧室、科技室、娯楽室があり、美術・音楽などの文化娯楽活動が行われた。図2は、設立当時、科技グループの児童たちが科技室で実験をしているところである。この大連市児童文化館は現在の大連市少年宮となっている。

中国で初めての少年宮（正式名称は「中国福利少年宮」）は、1953年6月1日に元国家名誉主席宋慶齡が上海市延安西路64号に設立し、翌54年に、毛沢東自ら「少年宮」の宮名を揮毫したことから、「少年宮」という宮名が全国的に広がっていくこととなる。

当初、校外教育は国が現代化建設の目的を達成するために、国家の経済と社会の発展に必要な人材を養成したいという考えではじまった。1953年に設立された「少年宮」は、中国の校外教育施設の中心とみなされ、その後、1980、90年代に全国に拡大・発展するのだが、このような変遷は、その時代の社会背景と密接に関係している。

中国は1978年に中国共産党第十一期中央委員会第三回全体会議で国家の改革目標を確立した後、改革開放路線に沿い、社会を発展させるために人材育成を迫られた。少年宮は校外教育の主たる場所として政府と社会から注目され、さらに、1990年以降、校外教育は探索段階から法制化、規範化の段階へと進んだ。

校外教育の位置付けは、1978年の改革開放後、全面回復と積極的推進の時期に入り、独立した教育の地位を与えられた。特に1985年以降、中国の教育体制改革に従って、校外教育に対する方針・政策・要求がなされ、2000年までには主に校外教育の位置づけと役割が確立した。2000年頃は校外教育の基礎を築く重要な時期となり、同時に素質教育が全面的に推進されだした。現在では、校外教育は素質教育を実施する場として、学校教育と共同で人材育成の目標を担っている。

以上のように、中国の校外教育は度々の改革と発展のなかで段階的に改善・強化され、



図1 1949年の大連市児童文化館²



図2 科技グループの児童たちの実験中の風景³

確立されてきたというプロセスを経ている。最も大きな変化は、校外教育は学校教育の従属状態であったものが、現在は学校と共同で人材育成を担うという地位を与えられていることだろう。また、校外教育機関は少年宮しかなかった状態から、現在は公立と私立の教育機関があり、共同で地域の教育活動の展開を担う役割を果たしている。ここに中国の校外教育の地位が確立され、さらに、校外教育は規範化されつつある。

(2) 校外教育の構成

先述したように、現在、中国の校外教育は公的教育機関と民間が経営する私立教育機関に大きく分けられる。

公的教育機関には、各地方の行政・教育局などが運営する少年宮・青少年宮、美術館、博物館、科技馆、文化館、青少年活動センター、児童活動センター、青少年教育基地などがある。これらは義務制度の校外教育機関ではないが、地方政府が非営利、公益を目的として運営しており、社会性・実践性をもつ活動場所となっている⁴。

公的校外教育機関はすべての児童・青少年に対して、学校教育の実践、社会教育、校外活動教育の公共文化活動のサービスを提供しながら、児童・青少年の視野を広げ、多様な興味を育て、特技や趣味を発展させ、実践力や才能を伸ばし、心身を発達させるなど、全人的成長を促進することに重要な役割を果たしてきた。公的教育機関では公益性から、無料またはわずかな料金で学習することができる。ただし、公益性ゆえにすべての児童・青少年に校外教育を提供することはできず、また教育方法や教育理念の転換もすぐにはできない。

一方、私立教育機関は、学校の運営資格をもつ教育機関であり、営利を目的とする。こ

れらの私立教育機関の多くは学校周辺やデパートなどに設置されているが、公的校外教育機関の敷地内や建物の中に入っていることもある。多くの私立教育機関はすでに年数を経っており、豊富な経験と柔軟な教育形式で優れた教育サービスを行い、その内容も時代の要請に沿っている。柔軟な教育方法や優れた教育資源は私立教育機関の特徴であるが、具体的な規範と基準が不足しているため、学校間の教育レベルの格差が生じている。

3. 少年宮の現状と課題——聞き取り調査結果から

中国の全国各地に設立された児童・青少年のための少年宮は、政府が設立し、資金を提供している。その活動は学校の授業の補習、美術、音楽、撮影、舞踏、書道、スポーツなどさまざまである。現在、多くの保護者は子どもの芸術教育の選択において私立の芸術教育機関を選択する傾向にある。このことは少年宮の衰退とも関係があるのではなかろうか。

そこで本研究では、少年宮の衰退状況を明らかにするために、実地調査をした。調査地は中国の第一線都市⁵ではない山東省済南市で、2019年7月13日に済南市青少年宮で聞き取り調査を実施した。調査対象者は少年宮の美術教師および運営管理者で、少年宮の運営状況、特に美術教育に関してはカリキュラム、教材、教育方法などについて質問した。

以下はその結果である。

(1) 運営状況の衰退

運営状況の現代的課題としては、有料化、優秀な教員の流出、開設科目の乏しさを指摘できる。

無料または安価な学習料で受けることがで

きる少年宮教育は、その特徴に公益性を掲げている。設立当初は、学校が推薦した優れた才能をもつ児童・生徒を中心に、主に無料の英才教育を行ったり、あるいは困窮家庭の児童や社会最低生活保障金を貰っている親の子どもに無料の教育を行っていた。当時、一部の科目は有料であったが、無料科目が大多数を占めていた。しかし、現在は有料科目の方が多くなっている。

濟南市青少年宮の科目をみると、美術コースは、有料のクラスと無料のクラスがあるが、開講されるのは有料の方が多い。有料クラスの授業料は18回で810～1,260元（日本円約13,000円～20,000円）である。ちなみに、2019年の夏季教室は、生活困窮者のための無料の募集人数は美術15人、書道15人、舞踊15人、言語15人、声楽15人、閲読15人、数学15人で総数は105人であった。しかし、有料の美術コースの募集人数は400人以上であった。公立でありながら利用料を徴収しているということは、少年宮教育が利益を追求していると同時に、公益機能が弱体化していることを示唆している。

次に、少年宮の教員構成をみると、教員は正規（国家公務員）と非正規（契約制）に分けられる。正規の教員の報酬は国が支給し、非正規の教員の報酬は少年宮が支給する。少年宮の非正規の教員の報酬は、担当しているクラス数に応じて、月収は約2,500～3,500元（日本円約39,000～54,000円）であり、正規の教員はそれより高い。ちなみに、濟南市人力資源局と社会保障局が2018年6月20日に公表したデータによると、2017年の濟南市の職員の一人当たり月収平均は5,850元（日本円約91,000円）⁶であった。これからみると、少年宮の非正規教員の収入は低い。これは教員が流出する一因になっている。

現在、少年宮の敷地の一部を私立教育機関

に貸し、その収入を少年宮の運営資金として補充しているところがある。濟南市青少年宮も敷地内に有料の民間施設の教室がある。この民間施設は少年宮の運営資金と同時に教育科目も補充している。

つまり、少年宮は科目数を増やし、内容を充実させるため、私立機関と共同で教育活動を行っているわけである。しかし、このような公立・私立教育機関が共存している状況では、少年宮の使命が問われ、少年宮自身の教育力の拡大や教育環境の改善は望めない。

(2) 教育機能の衰退

一方、教育の現場の課題には、求心力が低い、カリキュラムが古い、教材が単一である、教育方法が旧態依然であることなどがある。

少年宮で学ぶ一部の児童・青少年の学習に対する意欲は低下している。多くの児童・青少年が少年宮に通っているが、その殆んどは保護者の希望で学ばせているため、子どもが自発的に希望して行っているわけではない。保護者は、少年宮は公的教育機関だから安心して勉強させることができるし、授業料も安いと考えている。

また、芸術のコンクール、展覧会をよく開催するので、子どもには様々な賞を獲得する機会が与えられる。そのために、少年宮で勉強させたいという保護者の功利心が親が少年宮を選ぶ理由の一つとなっている。しかし、少年宮の視覚環境と教育の内容は私立の芸術教育機関に比べて劣っていることは事実で、カリキュラムの特色もはっきりしていない。そのため、少年宮の求心力は低下しつつある。

少年宮の美術教育をみてみると、少年宮独自の教科書を基にしている。その教材とカリキュラムは少年宮の教師が編成し、作成している。教育方法はその教科書や絵本を基に、写生、模写を教えている。教育カリキュラム

は特色に欠け、美術材料や道具の使用は限られている。たとえば絵画の材料は色鉛筆とクレヨンが主であり、美術材料や道具の種類は少ない。それに対して、私立美術教育学校は、子どもの美術学習への興味や創造意欲を喚起するするために、様々な画材を用意し、造形・工作にも力を入れている。

一人ひとりの個性を伸ばすことは、校外教育の特徴のひとつである。少年宮は、常時芸術コンクールや展示会などを行っているが、学習の成果と作品の完成度を重視しすぎている。技能や技巧の学習と訓練を重んじるだけで、一人ひとりの子どもの個性の発達、審美力・想像力・創造力などの資質・素養の育成や指導が軽視されている。つまり、教育課程の内容や教育方法は実技の訓練に重点を置いているが、校外教育において最も重要な児童の個性、創造性などを伸ばすことがおろそかになっている。少年宮は教育収益の追求と、スキルの育成を重視しており、資質素養の養成がおろそかで全人的教育の調整がまだ不十分である。

このような理由から、私立芸術教育機関を選択する者が増えてきている。また近年は、私立芸術教育機関の活発化に伴って、校外教育の資源が豊かになり、子どもと保護者はあらゆる教育の選択肢を持ち、保護者の校外教育の内容の選択と要求も高まっている。そして、少年宮教育の吸引力・影響力の低下は、一方で多数の子どもと保護者にとって、少年宮以外の校外教育の選択肢が拡大されることである。現在の少年宮は子どもの学習費負担者である保護者が私立の校外芸術教育へ関心を移しつつあるという現状に直面している。

以上は、調査の結果からみえた少年宮の現状である。

次に、少年宮の衰退について、社会、経済、教育意識の3つの視点から、原因を解明する。

4. 社会的側面

少年宮など公的な校外教育の場所は児童・生徒に対して数が全国的に不足している。その上に地域間の教育資源配置は不均衡で、とくに都市と農村間の不均衡状況が校外教育の発展に影響している。児童・青少年数が毎年増加していることから、少年宮の発展は私立の教育学校の成長率に比べて明らかに遅れているといえる。

2008年、中国教育部は500余箇所の校外の活動場所（少年宮、未成年者の校外活動場所や青少年校外活動センター等の教育行政の機関に属する場所を含む）に対するサンプリング調査を行った。その結果、少年宮あるいは少年の家などの青少年の活動場所は、全国で平均7万人の未成年者に対して1つしかなく、しかも、多くは建築面積が1,500平方メートル未満であった。ちなみに全国の半数以上の校外の教育活動の場所の面積は2,000~3,000平方メートルである。18歳未満の未成年者は全国で約3億6,700万人おり、1つの場所あたり3,000平方メートルで計算すると、1人当たりの校外活動場所の面積は0.041平方メートルになる⁷。これらのデータから見ると、少年宮などの校外教育の場所は児童・青少年の数に対応することは難しく、児童・青少年の校外教育への膨大なニーズを満たすことができていない。

2017年末のデータ⁸によると、済南市の2017年末時点の在籍人口は643.6万人であり、そのうち就学前の児童および小・中学生は97万人で、総人口の15%を占めている（済南市統計局、2017年）。

表1は、2013年~2017年の済南市の就学前児童、小・中学生の人数の推移である。児童・生徒数が年々増加していることから校外教育に対する教育ニーズも増えていることが推測

表1 山東省済南市の就学前、小・中学生の人数の推移

(万人)

	2013年	2014年	2015年	2016年	2017年
就学前教育	17.35	18.41	19.93	20.95	21.74
小学生	39.42	40.51	41.44	43.23	44.66
中学生	30.81	30.80	30.16	29.84	30.56
合計	87.58	89.72	91.53	94.02	96.96

される。しかし現在、済南市の少年宮の数は10箇所（本部1、分宮5、区立少年宮4）しかない。公表されている各少年宮の規模と教員数および少年宮情報によると、この10箇所の少年宮は毎週最大3万人余りを収容して授業をしているものの、この数字は全市の0～16歳の子どもの3%にすぎず、莫大な児童・青少年を少年宮だけに頼っている、校外教育へのニーズを満たすことは非常に困難であることがわかる。

一方、『教育宝』⁹のデータによると、済南市には私立の文化・体育・芸術の児童教育学校は520箇所以上ある。このうち私立の児童美術教育学校は155校あり、その内1,000人以上の規模の学校は20校近くある。そのため、私立の児童美術教育学校は多くの校外教育のニーズを担っている。

このように少年宮の数が少なく、学習者も

少ないということは少年宮の占める校外教育の割合の低さを如実に示している。

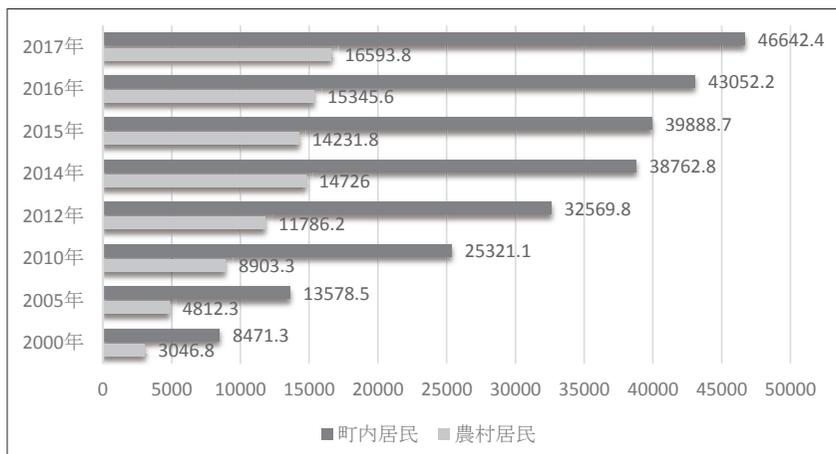
5. 経済的側面

近年、中国は社会経済の成長に伴って国民の経済状況も急速に向上している。国家統計局の『2017年国民経済と社会発展統計公報』（国家統計局）によると、国民の総支出の中で、教育・文化・娯楽的消費に使われた費用の割合は11.4%に達した。家庭の経済能力は校外教育を選択する重要な要因になっている。現在、少年宮と私立の校外教育機関は農村部にも設立されはじめているが、校外教育の増加は都市部で顕著である。

『2018済南統計年鑑』¹⁰から済南市市民の経済状況を見てみよう。図3は、2000年～2017年の済南市市民が1年間に自由に使える金額

図3 済南市市民が1年間に自由に使えるお金の推移

(単位：元)



出所：『2018済南統計年鑑』

である。これを見ると、2000年から2017年の間に都市も農村も5倍以上に増えている。そのため、市民の生活力・購買力は高まり、子どもの教育への投資が増えると同時に、教育の選択も拡大していることが推測される。

家庭の経済力は子どもの教育に投入する額を決め、この教育投入への寡多が教育資源のレベルを決める。経済の発展に伴って、様々な生活のコストも増える。子どもの教育に対する家庭の関心が高まれば、校外教育への投入は増えるであろう。『2015年の基礎教育発展調査報告』によると、中国全土で行われた家庭調査のうち、全体の約50%が子どもの学校以外の教育費に毎年5,000元（約80,000円）以上を投入しており、25%の家庭が10,000元（約160,000円）以上を投入している。

校外教育の授業料の徴収状況を見ると、少年宮の美術コースの授業料は、どの少年宮も基本的に同じで、週1回で45～70元（約700～1,100円）である。一方、私立の児童美術教育学校はまちまちで、大体1回の授業料が40～200元（約600～3,100円）である。この数字から、保護者の教育費投入の方向を推測することができる。

保護者が校外教育機関を選ぶ理由は、校外教育機関の教育の質に対する関心度が最も高く、48.8%を占め、次は教育機関の評価で21.3%、授業料が18.8%、カリキュラムと教材の質が18.8%、アフターサービスが11.3%、設備が5%、その他7.5%となっている（複数回答）¹¹。

家庭の収入の増加に伴って、保護者の関心は授業料よりも、教育の質に集中し始めた。家庭の収入の増加は校外教育への投資を増加させるとともに、家庭の教育偏重にもつながる。さらに、家庭の教育観は教育の選択肢を広げ、校外教育のニーズにも影響を与えているといえる。保護者の教育ニーズも校外教育

を選択する推進力になっている。

6. 保護者の教育意識——アンケート調査結果から

近年、家庭教育の意識の変化に伴い、家庭教育や社会教育の重要性がより多くの保護者に認識されるようになってきている。現代の若い保護者は子どもの自主性や自立性を尊び、教育の選択の上でも子どもの意志を尊重している。そのため保護者の教育意識と家庭の教育観は、子どもの教育選択に重要な影響を及ぼす。

1979年に中国で「一人っ子政策」¹²が実施されて以降、中国の特色ある家庭構造、即ち「4-2-1」¹³の家族構成パターンが形成された。そのため、一人っ子の家族構成での子どもの教育問題に関心が集まっている。

若い保護者の教育意識の変化に伴って、子どもの教育選択は従来の「点数至上」の教育観念から「全体的な発達」を意識するようになった。子どもの最初の教育は家庭で行われるため、家庭の教育環境は子どもの将来に大きな影響を与える。たとえば、保護者の価値観・審美観・教養・社会文化レベル、コミュニケーションのとり方などである。

一方、学校教育も変わり、自分自身も素質教育を受けた若い保護者たちは素質を發展させることの重要性を認識しているため、子どもの主体的な発達や素質を伸ばすという観点から、教育方式を選択することが増えている。家庭教育においては、保護者の教育意識が子どもの教育の方向性を決める。そこで保護者の教育意識について知るために、本研究では、少年宮と私立の児童美術教育学校（以下、私立美術学校と省略）の美術の学習者の父母100人を対象にアンケート調査「校外教育に対する保護者の教育意識調査」を実施し

た。調査は、済南市青少年宮（美術コース）と私立美術学校で実施した。

なお、アンケート調査の統計分析にはSPSS Statistics24.0を用いた。

<調査の概要>

調査年月日：2019年7月13日

調査対象者：①済南市青少年宮の5～16歳の学習者の保護者50人（30～40代）（少年宮が募集する子どもの年齢は5歳から）
②私立美術学校の3～16歳の学習者の保護者50人（30～40代）（私立美術学校が募集する子どもの年齢は3歳から）

調査方法：子どもの授業中、外で待っている保護者に調査票を直接渡し（1世帯1票）、その場で記入してもらい、回収した。

回収数：100票（少年宮：50票 私立美術学校：50票）

有効票数：100票

調査内容：美術科目以外に受けている科目、保護者の学歴、親が校外教育を受けた経歴の有無、美術学習を通して身につけさせたい力など

以下、アンケート調査の結果から、保護者の教育選択に関する意識を見ることにする。

子どもの習いごと（複数回答）は、美術の他に「舞踊」34%、「音楽」25%、「書道」24%、「その他」18%、「武術」5%となっており、美術以外の科目では、舞踊、音楽が人気であった。

保護者の学歴と、子どもの校外教育（美術）の選択傾向をみると、高学歴の保護者ほど私立美術学校を選択していることが確認された（表2）。この差はどこから生じるのだろうか。

そこで次に、美術の学習を通して身につけさせたい力（複数回答）について質問をしたところ、少年宮の保護者は「絵画能力」や「技巧法」といったいわゆる上手に絵を描く力をつけることを希望し、私立美術学校の保護者たちは「創造力」の育成を重視していることがわかった（表3）。

次に、保護者の学歴により、子どもに身につけさせたい素養に違いがあるかどうかを確かめたところ（複数回答）、大学卒業以上の保護者たちは「審美力」「想像力」「創造力」

表2 保護者の学歴と校外教育の選択

(%)

保護者の学歴	少年宮	私立美術学校	合計
高卒以下	88.2	11.8	100.0 (17)
大学卒業	54.2	45.8	100.0 (59)
大学院修了	12.5	87.5	100.0 (24)

$\chi^2 = 23.86$, $df = 2$, $p < .001$

() 内は人数

表3 美術学習を通して身につけさせたい力（複数回答）

(%)

	絵画能力*	手を動かす	技巧法の運用*	審美力	想像力	創造力**
少年宮	72.0	56.0	44.0	72.0	74.0	64.0
私立美術学校	52.0	38.0	24.0	74.0	82.0	90.0
平均	62.0	47.0	34.0	73.0	78.0	77.0

*5%水準で有意、**1%水準で有意

表4 保護者の学歴と美術学習を通して身につけさせたい力

(%)

	絵画能力	手を動かす	技巧法の運用	審美力**	想像力	創造力**
高卒以下	70.6	47.1	29.4	47.1	58.8	47.1
大学卒業	64.4	47.5	37.3	83.1	81.4	81.4
大学院修了	50.0	45.8	29.2	66.7	83.3	87.5
平均	62.0	47.0	32.0	73.0	78.0	77.0

*5%水準で有意、**1%水準で有意

の素養を重視していることが判明した（表4）。

以上より、保護者の学歴は子どもの校外教育の選択に影響を与えていることがわかった。高学歴の保護者ほど子どもの「審美力」「想像力」「創造力」の育成を重視し、少年宮よりも費用が高くても私立美術学校を選ぶ傾向が窺えた。それは、1993年に素質教育が実施されて以降、素質教育を受けた高学歴の保護者たちが子どもの素質向上の必要性をさらに意識し、よりよい人格形成が将来の進学・就職、問題解決能力などに大いに役立つことを認識していることの現れであろう。

保護者の意識調査の結果から、高学歴の保護者は子どもの美術教育への関心や期待を、素養・資質の形成に置いていることがわかった。このことが、少年宮美術教育の衰退に繋がっているとも考えられる。

ところで、少年宮教育の一般的な科目として、美術以外に、舞踊、声楽、器楽、書道、武術などの科目がある。特に、音楽、舞踊、声楽などの科目は、旧態依然の教育方法であるため、素質教育の要求と目標に対応しにくい。そのため、少年宮教育は資質・素養の育成を目的とした教育ニーズを満たすことが難しく、その教育力の拡大は極めて限られたものとなりやすい。

音楽芸術雑誌『音楽時空』の「校外教育における音楽教育の現状と対策の検討—少年宮を例に—」では、中国の教育分野は重大な改革

に直面しており、少年宮は応試教育（試験のための教育）を実施しているため、国民の素質を高め、音楽の素質の高い人材を育成することをせず、本来の教育機能を失ったと述べている（曲2014：196）。

教育雑誌『中国校外教育』の「現在における校外の舞踊教育の現状に対する思考」によれば、様々な舞踊教育学校と一部の少年宮では、適切なダンス教材に欠け、教師の教材に対する活用が不足していた。そして試験を目的とする学習と訓練では、子どもの心理と生理の特徴が軽視され、技術の訓練ばかり強調しすぎる。子ども一人ひとりの個性差に応じた教育方法が欠如しては、素質教育の要求を達成できず、子どもの総合的能力を向上させることはできない（裴2010：391）。

また、学術雑誌『戯劇の家』の「少年宮における少児声楽教育の現状及び思考」では、声楽教育についても、少年宮は教師が旧態依然の教育を行っているため、一部の学習者のニーズしか満たすことができないと述べている（浦2018：214）。

少年宮教育の旧態性は、その教育目標と教育方法が従来の試験のための教育から素質教育への転換が不完全であるためである。素質教育からみると、このような教育モデルは、子どもの学習成果に過度の関心のある一部の保護者のニーズを満たすことはできても、多くの子どもたちの資質・素養を全面的に発展させるという教育目標の達成は困難である。

7. まとめと提言

子どもの校外教育の中心的存在として設置された少年宮は、設立以来、学校での知識を補い、拡大し、興味、特技、才能を育成する場として重視されていたが、素養・資質を伸ばす教育が求められる現在、衰退が徐々に露呈しはじめている。

少年宮の衰退傾向の背後にあるのは、家庭の収入の増加によって子どもへの教育投資が高まったこと、保護者の高学歴化による教育意識が変化したこと、多くの保護者が優れた教育資源を求めようになったことであった。

保護者の高学歴化に伴って教育意識も変わり、子どもに対する教育のニーズも変化している。少年宮教育は、より多くの保護者の教育ニーズに対応することが難しくなっている。校外教育の中心であった少年宮の衰退は、必然的に教育力や教育機能の縮減をもたらす。少年宮が徐々に私立教育学校に置き換わると仮定すると、より多くの子どもたちが社会文化活動に参加する機会と公益教育を受ける可能性を失うことになる。

少年宮が校外教育の中心としての役割を着実に果たすためには、少年宮の求心力を高め、少年宮での教育に対する保護者の期待と信頼を取り戻す必要がある。そのため、衰退傾向

にある少年宮教育を再構築するために3つの面から提言してみたい。

- ①少年宮の公益機能を拡大する。豊富な社会的実践活動を組織することにより、より多くの児童・青少年を少年宮で学ばせる。そのためには、少年宮の数を増やし、教員の待遇を改善する。また、授業料を無料あるいは低料金にする。
- ②教育環境を改善する。少年宮の施設を最大限に活用し、さまざまな芸術の展示活動や多様な活動体験を通じて、学習の楽しみを与え、さらにそれぞれの学科の特徴による教室環境に合わせて特色のある教育を行い、教育環境の吸引力を強める。
- ③教育観念を転換する。子ども一人ひとりの個性の発揮を重視し、資質・素養を育成することを第一とし、教育課程の内容を充実させ、学習への興味をもたせる。また、「技術技能偏重」のような単一の教育方法を变え、優れた私立教育学校の教育方式を取り入れ、教育力の改善を図る。

将来的には、少年宮教育が本来の役割を十分に発揮し、より多くの子どもを学校以外の活動に楽しく参画させると同時に、校外教育を通じて子どもたちの全人的な成長・発達を促進し、素質教育の育成目標を実現することは社会的に意義のあることである。

〔注〕

- 1 青少年宮は、少年宮とも呼ばれ、一般的には呼び方の違いだけで機能や規模は基本的に同じである。
- 2 中国青少年放送テレビネットワーク：『大連市少年宮誕生記（二）』、<http://www.vocy.cn/vocy/vocyArticle/preview/1729>（2019年2月14日アクセス）
- 3 大連市少年宮：http://www.dlsng.com/news_view.php?n_id=3971&c_id=24（2019年2月14日

アクセス）

- 4 中国青少年宮協会、『中国青少年宮協会章程』、<http://www.cnypa.org/qsnxhzc.jhtml>（2019年1月30日アクセス）
- 5 第一線都市とは、全国的な政治活動や経済活動などの社会活動で重要な地位にあり、指導的役割を備え、波及力・牽引力をもった大都市を指す。中国で現在、一般的に第一線都市とみなされているのは、北京、上海市、広州市、天津市、深圳市である。調査地は政治や経済の影響を直

- 接受けない、普通の都市である済南市を選んだ。
- 6 済南市人力資源と社会保障局・済南市統計局、『2017年済南市の従業員の平均賃金を公表する通知について』<http://law.51labour.com/lawshow-100180.html>(2019年9月5日アクセス)
 - 7 中華人民共和国教育部：『2008年教育統計データ』、http://www.moe.gov.cn/s78/A03/moe_560/s4628/s4631/(2019年12月17日アクセス)
 - 8 済南市統計局国家統計局調査隊編集、『済南統計年鑑2018年』、中国統計出版社、2018、pp.30-72。
 - 9 教育宝<http://jn.jiaoyubao.cn/mspx/>(2019年9月3日アクセス)
 - 10 済南市統計局国家統計局調査隊編集、『2018済南統計年鑑』、中国統計出版社、2018、pp.366-371。
 - 11 中国教育在線『2015年の基礎教育発展調査報告』、<http://www.eol.cn/html/jijiao/report/2015/pc/content.html#3116> (2019年8月28日アクセス)
 - 12 一人っ子政策とは、中華人民共和国における人口政策である。とりわけ1979年から2015年まで導入された厳格な人口削減策（計画生育政策）を指す。
 - 13 「4-2-1」とは、一人っ子政策の夫婦2人が結婚した後の家族構成である。つまり4人の親、夫婦2人及び子ども1人を指す。

〈引用・参考文献〉

(アルファベット順 中国名は日本語読み)

- ・張印成『課外校外教育学』北京師範大学出版社1997
- ・中華人民共和国国家統計局『2017年国民経済と社会発展の統計公報』2018
- ・張小帆「済南市青少年宮の市場化運作の研究」華中科技大学修士論文2012
- ・福田隆眞・福本謹一・茂木一司『美術科教育の基礎知識』（四訂版第6発行）建帛社2015
- ・裴正暁「現在における校外の舞踊教育の現状に対する思考」『中国校外教育』2010.2
- ・浦英姿「少年宮における少児声楽教育の現状及び思考」『戯劇の家』2018.9
- ・尹少淳『美術教育学新編』高等教育出版社2010
- ・高寧「少年宮發展の苦境と出路の探析」遼寧師範大学修士論文2002
- ・許德馨『少年宮教育史』海南出版社2000
- ・曲芸「校外教育における音楽教育の現状と対策の検討—少年宮を例に」『音楽時空』2014.5
- ・王一陽「少年宮美術教育現状の研究」山東芸術学院修士論文2012
- ・劉霄・福田隆眞「中国山東省における私立児童美術教育について」『山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要』（第46号）2018
- ・劉斯佳「現代中国における校外音楽教育の研究—長春市少年宮と顯順琵琶学校を中心として」静岡文化芸術大学大学院文化政策研究科修士論文2015
- ・済南市統計局国家統計局調査隊『2018済南統計年鑑』中国統計出版社2018